

クルーガー図書館の創設と存続に貢献した同志社人たち

—京都国際文化協力会と浅沼園子—

坂 本 清 音

はじめに

こま
今まど子は、今から二十年以上前に、「京都にクルーガー図書館があつた」（『中央大学文学部紀要』一九九八）を発表した。この論考は、クルーガー図書館で働いていた浅沼園子が保管していた膨大な第一次資料を元に書かれたものである。

筆者には、この論考を知る前に、同志社女子専門学校卒業生である浅沼園子の遺児、中岡百合と木佐木翠子との出会いがあり、その後何度か訪問して、園子の父小林政治（天眠）と、小林家の一男六女（娘六人のうち、五人は同志社女子部卒）に関する聞き書きの機会を得ていた。その間に、九四年の園子の生涯の中、唯一社会に出て働いた一二年間のクルーガー図書館との関係に注目するようになり、今の論文を知ることになった。

図書館学が専門の今の論文では、クルーガー図書館本来の働きは言うに及ばず、その成り立ちや組織図、財団を作つて図書館を支えた人たちに関する事柄も扱われているが、筆者には、今論文中に協力者として次々と紹介

される同志社および同志社関係者が気になった。なかでも図書館を立ち上げる前から、同志社人が中心となって組織された「京都国際文化協力会」(The Kyoto Citizens Society for International Cultural Cooperation)の、これまで殆ど知られていなかった働き、クルーガー図書館の開館式が同志社本部で行われた理由、クルーガー図書館の事務を支えた女子部卒業生(同志社人の一人)浅沼園子のキャリアも検証しておく必要があることに気づいた。本論文では、クルーガー図書館(クルーガー財団を含む)と、その創設および存続に関わった同志社人(主に「京都国際文化協力会」と浅沼園子)との関わりをまとめておきたい。

I 「京都国際文化協力会」の始まりと働き

1 スタート

一九四五年九月二日のミズーリ号上での無条件降伏の後、日本国民はもはや空襲に怯えることなく、灯火管制の下、家を暗くする必要はなくなったが、衣食住は極度の貧窮を迎え、これまでの軍国主義を捨てて一体どの方向を目指して生きていけばいいのかと茫然自失する日々であった。そのような中、空襲を免れた京都で、逸早く新しい方向を見定めて動き始めたのが、戦時中はキリスト教主義教育を掲げていたが故に迫害を受けていた同志社関係者であった。彼らは、占領軍が正式に京都に進駐してくる前に、九月に入ってから先鋭隊(特殊部隊)として京都入りした第六軍の将校と接触し、「京都国際文化協力会」(以下、「協力会」と略すこともある)の立ち上げを計画していたようである。

呼びかけ文(設立趣意書)が発行されたのは、敗戦の一ヶ月五日後の一九四五年九月二十日、会長は大沢商会

社長の大澤善夫（祖父善助以来の同志社ファミリー）で、副会長は同志社大学教授の難波紋吉、幹事長は同志社大学総長秘書の森川正男であり、その他多数の会員を揃えていた。さらに協会の中には婦人部もあり、英語のできる婦人たち（大澤徳太郎夫人幸恵もその一人）が参加していたらしい。以上の説明の出所として、今論文では「京都国際文化協会設立趣意書1枚」と、注に引用が明記されているが、残念ながら未見である。趣意書に列記されていた「その他多数の会員」の中には、同志社人の名前が多くあったことが予想される。

「協力会」は、敗戦直後の京都において、「連合軍の進駐が平和的、友好的、効率的に行われるよう便宜を計り、援助をしていくことと、日米両国の相互的文化交流を緊密に行うこと」（今 五九）を設立目的として、水面下でスタートしようとしていた。

2 規約

前述のように「京都国際文化協会設立趣意書1枚」は未見であるが、伊藤彌彦の「占領軍同志社関係資料（1）〔談叢〕三八号、二〇一七）の中に、趣意書発行の十日後、一九四五年十月一日の日付で、この団体の Constitution のコピーが紹介されている（伊藤 三九―四〇）。三八号では、オリジナルの英文のみの紹介であるので、ここで翻訳しておく。

京都国際文化協力会 規約

第一条 名称 本会は京都国際文化協会と称す

第二条 目的 本会の目的

① 連合軍との、戦後の文化連携

② 文化交流を通して連合軍（特にアメリカ軍）との友好関係促進

③ アメリカ文化に関する調査・ゼミナール・講演・翻訳および書物やパンフレットの出版

第三条 事務所 本会の事務所は当座は同志社大学に置く

第四条 会員 会員資格は、本会の目的に賛同し、会員二名の推薦があり理事会で認められたもの

第五条 会費 本会の会員は入会金と会費を支払う

第六条 役員 本会の役員は、会長・副会長三名・理事数名・会計・顧問数名・事務員で、理事は総会で選出する

第七条 会計 本会の会計は入会費・会費・寄付による

第八条 規約改正 本会の規約改正は、定期総会で出席会員の $\frac{2}{3}$ の投票により行う

（太字、坂本）

さらに伊藤は、「京都の同志社大学幹部へのインタビュー結果の報告」に付いていた J. R. Sandberg, Captain, QMC. (肉筆署名) の、京都国際文化協力会についてのコメントも紹介している。「この新しく設立された団体は『リベラルな』ものであり、インタビューした人たちはやる気満々で、最初の仕事としてアメリカ人将校や部下のために（現在同志社本部が使用している）アーモスト館地階をサロン風の読書室に模様替えしている」（坂本訳）とあり、すでに両者が意気投合しているさまが浮かび上がる。

この規約の特徴的なことは、一ヶ月半前まで、戦争の直接相手であったアメリカ軍およびアメリカ文化と、同

志社との繋がりが強調されていることである。想像される理由として、同志社が明治八年にアメリカン・ボード派遣の宣教師たち（新島も、アメリカン・ボード準宣教師）によって創立された学園であり、その影響もあつて、卒業生の留学先が殆どアメリカであつた事実が挙げられる。青春時代をアメリカの大学で過ごした彼らには、もちろん苦勞の経験もあつただろうが、アメリカ民主主義社会生活の体験者として、それを評価する思い出も多くあつた筈である。

次に引用する「戦時中もアメリカに留まっていた」湯浅八郎の証言は、留学時代に彼らが見聞きしたアメリカ人のものの考え方を表しているだろうし、湯浅の証言の先を考えると、終戦後すぐに、アメリカ側から、やがて「協力会」を結成することになる、大澤善夫や同志社関係者に何らかのコンタクトがあつたと想像しても、事実無根なこととは言えないかもしれない。

ある時、「戦争中もアメリカに留まっていた湯浅のところ」国務省から人が参りまして面会したいと言う。その来客ですが、日本人の写真を三、四十枚持っていて：写真の人たちのことについて、お尋ねしたいというのです。見ると皆、京都の人なのです。同志社の理事の大沢さんとか、私の知っている人たちも相当ありました。当時の京都の一流市民です。：問題は何かと言うと、やがて進駐軍が京都に行くことになったら、軍の命令で京都を治めるなんてことは考えられないから、どうしても京都の有力な市民の協力を求めなければならなくなる：その時に、こういう人たちは、どういう反応をするのか、私の意見を聞きたいと言うのです。まだ戦争の最中ですよ。その時に、もうアメリカでは新しい日本をつくる時に、京都の市民の協力を得

なければならぬということを考えていたのですね」（『回想』六七）

3 京都国際文化協力会と同志社との関係

「協力会」のメンバーに同志社卒業生が多くいたであろうことは、設立の事情からも、会的首脳陣を担う人たちの名前からも推測できるとしても、あくまでも民間団体の活動であるので、果たして学園同志社との関係は如何ようであったかは確認の必要がある。

3-1 理事会での報告

まず、同志社との関係を裏付ける事実（資料）が、敗戦後初めて開かれた理事会（一九四五年一〇月三日）記録³の中に見出せる。それは、その日の「報告」の十二番目「京都国際文化協力会 奥村専務理事 口述」という項目である。それ以外は何も記述されていないので詳しいことは分らないが、このような早い時期に、それが理事会での報告事項の一つだったのである。

3-2 本部に仮事務所の設置認可

もう一つは、浅沼資料の中にあつた封筒である。中身はないが、裏には同志社専用の封筒であることを示す「京都市上京区今出川通烏丸東入 同志社 電話代表上③430番 振替口座京都2659番」が印字されており、その横に「京都市上京区今出川御門前同志社本部内（仮事務所）京都国際文化協力会 電話代表上（3）430番 振替京都25579番」というゴム印が押してある。これは規約の第三条にあつた「本会の事務所は当座は

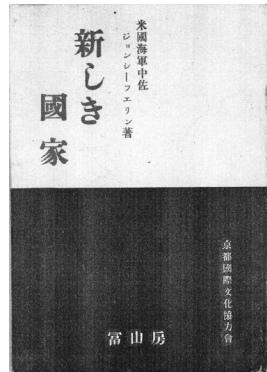
同志社大学に置く」を裏付けるものとみなしてよいだろう。また、前節「2 規約」につけた、サンドバーグのコメントの内容とも合致している。

4 京都国際文化協力会の最初の事業

「協力会」の主催で、一九四五年一〇月から一九四六年一月の間に、米国海軍中佐シーフェリン⁽⁴⁾による一三回の連続講演が行われた。その内容は、『新しき国家』と題して、二年後に同会編で富山房から出版された。講演が行われた日時や場所について書物中に記述はないが、クルーガー著の太平洋戦争回顧録によると、「同志社当局と共同で、民主主義の理想を説く連続講演会を催した」(Krueger 357g)とあるので、場所の多くは事務所のあるアーモスト館であったと考えていいだろう。

連続講演会は、「協力会」がイニシアティブをとって、第六軍に働きかけて実現した。一方「協力会」は、占領軍兵士のために日本語学校や日本文化講座を開いて、日米相互の文化交流の助長に力を注いだ。そして、第六軍司令官クルーガー大将の帰国に際しては「クルーガー図書館」の設立を支援し、「クルーガー図書館叢書」の刊行を企画したが、その第一輯がこの『新しき国家』(一九四七)であった。書物は日英両語からなっており、右から日本語、左から英語という体裁で、翻訳は熊谷直忠⁽⁵⁾であった。

『新しき国家』の編輯者は、「協力会」副会長・財団法人クルーガー図書館館長の難波紋吉であった。難波紋吉は一九二一年同志社を卒業するとすぐ渡米し、コロンビア大学大学院で社会学を勉強、修士号を取得して帰国、



『新しき国家』の表紙
(同志社大学図書館蔵)

長年同志社で教鞭をとっていた。戦前から数多くの民主主義に関する文献がある。難波は「編輯者の言葉」(『新しき国家』二一三)の中で、ポツダム宣言受託後における日本の民主化は日本国民に課された「絶対的任務」であること、そこで、「我々有志の者」が「協力会」の組織作りをし、米軍との連絡に努めつつ民主主義の研究や日米相互の文化交流の助長に力を尽くして来たことを記している。また、この書が「協力会」編で出版されたのは、第二条③の目的の一つ「アメリカ文化に関する講演と書物の出版」を實行するためだった。シーフェリン中佐は「日本に対しては…暖い理解と深い同情の持主」であったため、いろいろな方面から民主主義にまつわるテーマを選んで、「誠意と情熱を以て明快に所信を披瀝した」ので、聴衆は講演ごとに多くの示唆と感銘を与えられ、その結果、日米親善が強化されたことが何よりの成果であった、と言う。中佐の中に一貫していたのは、「民主主義の精神」「ヒューマニズム」「新しい国家創造への熱情」であり、それが、戦勝国、敗戦国を問はず、集まった人々の心を一つにしたと、難波は謝意を表している。

シーフェリン中佐は第一回目の講演「民主的思想」の冒頭で、①本講演は全然非公式のものであって、アメリカ陸軍や海軍の公式の意見を述べているのではない ②アメリカ軍籍にある兵士は本来米国民なので、自分も米国の一市民として、率直かつ正直に、自分の思想を述べる ③自分は今回の新事態に直面して、普通のアメリカ人が考えていることをお話しして少しでも聴衆の皆様の思想を啓発し、これによって少しでも平和の向上に役立つことができれば本懐だ、と述べている。

講演題と対象者は以下の通り。

『新しき国家—アメリカの民主主義に就て—』ジョン・J・シーフェリン講演会

演 題		講演対象
1	民主的思想	京都国際文化協力会会員
2	米国憲法の機能に就いて	〃
3	政府内に於ける婦人の分野に就いて	日本自由党京都支部の婦人達
4	武士道に対する批判	京都国際文化協力会会員
5	リンカーンの思想と日本	〃
6	米国に於ける学生生活	京都府立第二中学校生
7	日本学生諸君の為の民主主義の解説	第三高等学校生
8	父兄会の為に	京都本能国民学校の父兄会
9	小学校・中学校の校長並に先生の為に	京都市の一部の小学校や中学校の校長や教師
10	映画の中の民主主義	映画撮影所関係者
11	米国のクリスマス	同志社女学校生
12	日本の子供達に話したクリスマスの飾り木の話	日曜学校生か
13	民主主義の基礎	京都市内基督教諸教会の牧師達

なお、この書籍の著作権は著者から同志社大学に対して譲渡する、という内容の書籍が『新しき国家』に収録されている。⁽⁶⁾

II クルーガー図書館の設立と京都国際文化協会

1 クルーガー大将の略歴

昭和天皇による敗戦の玉音放送が流れた半月後、連合国軍最高司令官として厚木の空港に降り立ったダグラス・マッカーサー (Douglas MacArthur: 1880-1964) の姿は、今なお多くの日本人の記憶に焼き付いている。しかし、マッカーサー元帥の下でアメリカ第六軍指揮官として太平洋の島々で日本軍と戦闘を交え、最終的にアメリカ軍を勝利に導いたクルーガー將軍 (Walter Krueger: 1881-1967) のことを知る人は少ないであろう。彼はアメリカでも最も知名度の低い大将 (Holzimer 2-3) であり、K・C・ホルチマーが最初の本格的伝記 *General Walter Krueger: Unsung Hero of the Pacific War* を出版したのは死後四十年経った二〇〇七年のことであった。しかし生前には、太平洋の島々での勝利を讃えて一九四五年一月号の *TIME* 誌の表紙に選ばれたり、陸軍士官学校 (ウェストポイント) の卒業生ではないのに、一兵卒から「大将」に昇進した最初のアメリカ陸軍軍人として名を挙げている。

クルーガーは、マッカーサー来日 (一九四五年八月三〇日) の一ヶ月後に、日本の西部一帯 (九州、四国、本州南部) を統治する指揮官として、フィリピンから直行して和歌山港に上陸。彼の率いる第六軍は京都進駐を果たし、四条烏丸の大建ビル (現 COCON KARASUMA) に司令部を設置していた。クルーガー大将の入洛は九月二八日である (『京都新聞』昭和二〇年九月二九日)。

以下に、主としてホルチマーの著書から、クルーガーの軍人としての生涯だけでなく、図書館の名前にふさわ

しいと言える文人武官としての姿を短く紹介しておく。

クルーガーは、一八八一年一月二六日に西プロイセン（現ドイツ）で軍人の子として生まれたが、八歳で父と死別し、母は三人の子供を連れて叔父のいたアメリカ・ミズーリ州セントルイスに移住した。そこで同じく移民の、ルター派の牧師 Emil Carl Schmidt と再婚する。クルーガーはアメリカでは家庭で教育を受け、継父は数学と語学を、母はピアノを教えた。継父はクルーガーに厳しい生活訓練と強い知識欲を植え付けたので、その両方が彼の個人また職業生活の特徴となり、生涯を通して自分を律し、学ぶことに没頭する人間になった。

長じては公教育も受け、一五歳の時に軍人の道に進みたいと願ったが、母の反対で一旦は大学で土木工学を学ぼうとしていた時に、米西戦争が始まり軍役に入った。八ヶ月で軍曹に昇格した後は、米比戦争を皮切りに、第一次・第二次世界大戦に参戦し、Captain → Major → Colonel → General と次々と昇進し、数々の勲章も授与されて、軍人としての頂点にまで上り詰めた。

長男の証言によると、「父は仕事（勉強）が趣味の人で、家にいるときは書齋に籠って、いつも机に向かっていた。父の書齋には、何カ国語もの蔵書があり、飽くことのない読書家」(Holzinger 10-11) だったようである。三〇歳の頃には、ドイツ帝国軍関連の著作、Black の二巻本 *Tactics* (『戦術』) を翻訳 (一九一一年) (Holzinger 23)、実戦の合間には、アメリカ陸軍指揮幕僚大学 (一九〇七)、ラングル遠征軍幕僚大学 (一九一八)、陸軍大学校 (一九二一)、海軍大学校 (一九二六) で学び、卒業後は語学教師として英語、仏語、スペイン語、ドイツ語などを教えた。

引退後の一九五三年には、太平洋戦争の回顧録 *From Down Under to Nippon: the Story of the 6th Army in World War II* を執筆した。序文で、書き遺すべきは単なる個人の思い出ではなくて第六軍の物語であり、太平

洋戦争の間、「遙かオーストラリア（地球の裏側）から日本まで」を第六軍が集団移動しつつ戦った記録が重要である、と述べ、この本を共に戦った第六軍の戦友に捧げている。

2 「協力会」二番目の事業、クルーガー図書館の発足

浅沼資料の中に、クルーガー図書館誕生の経緯を物語る二通の手紙がある。それは、①一九四五年二月二日付で、西部復員連絡事務局長の三好康之から、第六軍の参謀長デッカー中将（George H. Decker 1902-1980）に宛てたものと、②一九四五年二月二六日付、デッカー中将から三好宛の返信である。

三好がデッカー將軍に送った書簡の大意は、日本が今回の戦争を引き起こした主因は知的教養の欠如と間違った教育であったこと、それを正すためには一日も早く庶民を再教育する必要があるが、この大切な時にクルーガー大將率いる軍隊を古都京都にお迎えしたことは実に光栄であった。そして將軍が大變骨の折れる統治を上首尾に終えて帰国しようとしておられる今こそ、その功績を讃え、後世まで忘れないための記念碑として、クルーガー図書館を設立することが相応しい時である。ついては、①この図書館にクルーガー將軍の名前をつけること、②設置場所としては、京大前の「日独会館」(Japan-German Society Club)の使用を認め、その一部を「文化クラブ」(Cultural Club)の設立のために使わせて欲しい、そして、③民主日本の教育を助けるのに役立つアメリカの書をできるだけ多く寄贈してほしいと願っている。三好は②の中で設立したいと申し出ている「文化クラブ」に、図書館の運営を委ねようとしていたのだろうか。

この要請の返事として、デッカーは、図書館にクルーガーの名前をつけることに本人の了承は得たが、設置場所として申し出られた「日独会館」は、現在、米軍が使っているので貸すことはできない。代替場所として、中

京区高倉通錦通り上る貝屋町五六五番地の「銀行クラブ」(Bankers Club)を推薦する。ここならクラブの経営者も日本政府の許可も得られるし、第六軍としてもこの建物を使用することに異議はない、クルーガー図書館の設置が日本国民の民主化に大きな貢献をすることを願うという内容だった。

この往復書簡からは三好が米軍トップとこのような交渉ができる立場にあったこと、企画の発案者であったことは分かるが、この企画を実行に移すための作業と資金をどの程度見通していたかについてははっきりしない。この手紙のやり取りは暮れも押し詰まった二月二日～二六日のことであり、その後わずか一か月足らずで、京都府や市の仲立ちもあつて京都国際文化協力会に運営が委ねられ、翌年の一月二三日には開館式が同志社本部で行われた。その翌々日にはクルーガー大将一行は京都を去って帰国の途についた(Krueger 369-371)のだから、かなり綱渡りの出来事だったに違いない。

3 同志社本部でのクルーガー図書館開館式

一九四六年一月二三日、同志社本部でクルーガー図書館の開館式が行われたことは、招待状の存在からも裏付けられる⁽⁸⁾。開館式が行われた一月二三日は新島の召天記念日であり、その年にも若王子山頂で早天祈祷会が行われた。当日の有賀鐵太郎日記⁽⁹⁾によると、

一月二三日(水)晴 新島先生記念日



京都新聞 昭和21年1月24日
同志社本部での開会式
(前列左からクルーガー大将、デッカー少将)

六時半、若王子山頭祈禱会。片桐女専校長の奨励。下山して帰宅。…二―三時、クルーガー図書館発会式（本部で）。第六軍が引き揚げるに際して、国際文化協力会に寄贈してゆく図書を以て氏の図書館の出発としようとするわけである。場所は華族会館に置かれる予定。クルーガー大将も此会に出席した。

とある。これにより、終戦五ヶ月後の同志社では今も続く早天祈禱会が挙行されたこと、当時文学部神学科主任であった有賀鐵太郎は祈禱会にも開館式にも出席したことが分かる。そしてこの日の来賓には、クルーガー大将はじめ軍関係者のみならず、京都府知事木村淳、市長篠原英太郎の臨席も得られ、クルーガー図書館のスタートが大々的に祝われた（出席者約八十名）。この会の席上で、「協力会」会長の大澤善夫がクルーガー大将に捧げた感謝状、府知事・市長の祝辞原稿が浅沼資料に残されている。

大澤会長の感謝状は、激しい戦争直後であるにもかかわらず、第六軍将兵たちの「平和的で秩序正しく、友好的とさえ言える」進駐が、京都住民にとってどれほど印象深く、アメリカの民主主義の証に思っているかを伝え、敗戦後、軍国主義を捨てて民主国家日本再建への熱い想いが漲っている京都に今、クルーガー図書館が創立され、多岐にわたるアメリカ文化を学ぶ機会となる意義は極めて大きいことを称えている。

木村府知事の祝辞は、明治維新から真珠湾攻撃に至るまでの、日本の歩んできた道を反省を込めて振り返り、今や軍閥が掃き払われるのを機に、これまで日本人には知らされていなかった西洋諸国、中でもアメリカの歴史、政治、文化を正しく認識して将来の日本を築く必要があることを説き、そのような時期にクルーガー図書館が設立されることへの謝意を表明している。また、「協力会」がクルーガー図書館の維持経営の任を引き受けたことだけでなく、これまで占領軍と京都市民の間立って文化交流に努めてきたことを称賛している。

京都国際文化協力会経営「クルーガー図書館」より京都府立図書館「クルーガー文庫」まで

[I]	[II]	[III]	[IV]	[V]	[VI]	[VII]
名称 クルーガー図書館	CIE クルーガー図書館	クルーガー図書館	クルーガー図書	京都府立クルーガー図書館	京都府立上京分館 クルーガー文庫	京都府立図書館 クルーガー文庫
所属 京都国際文化協力会	CIE (Civil Information and Education Center) とクルーガー財団	クルーガー財団	京都府社会教育課	京都府社会教育課	京都府立図書館	京都府立図書館
場所 難波会館(分館)(保管) 上京区今出川通烏丸東入 (現同志社大学図書館)	日本生命(大建)ビル 中京区四条通烏丸東入 (現COCON KARASUMA)	京都大学附属図書館 左京区吉田本町	奥村女子会館(保管) 左京区川端丸太町	柴町会館(京都学芸大学 同窓会館) 上京区小山西大野町 (現北区 1955～)	①柴町会館 ②木島榎谷旧宅	左京区御崎成勝寺町
期間 1946.1.23～1946.9.30	1946.10.1～1949.3.15	1949.4～1949.11 開館は1949.6.30～10.30	1949.12.1～1950.1	1950.1～1951.5.14	①1951.5.15～1956.4 ②1956.5～1976.5	1976.6～現在

昭和21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52
1946	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77
46.1	46.9		[I] クルーガー図書館																												
46.10	49.3		[II] CIE クルーガー図書館																												
49.4	49.11		[III] クルーガー図書館																												
49.12	50.1		[IV] クルーガー図書																												
50.1	51.5		[V] 京都府立クルーガー図書館																												
[VI] 京都府立上京分館 クルーガー文庫	51.5		[VI] 京都府立クルーガー図書館																												
	56.4	②56.5	76.5																												
			[VII] 京都府立図書館 クルーガー文庫																												
			76.6～現在																												

4 クルーガー図書館の変遷（上）

このようにして誕生したクルーガー図書館であったが、それが図書館という名前で存続したのは一九四六年一月二三日から一九五一年五月一四日までの五年四ヶ月弱¹⁰⁾であった。その間、図書はいったんクルーガー財団から京都府社会教育課を経て約一年半後に京都府立図書館に寄贈され、上京分館の「クルーガー文庫」として分館が閉鎖される一九七六年五月までは、開架図書として直接利用された。現在は岡崎の京都府図書館の書庫に収蔵されている。

その僅か五年四ヶ月弱の間に四回にわたって、同図書館は経営団体も場所も転々とした。

しかも、移転の話が、いつも急だったこともあり、その都度、決してスムーズに事が運ばなかった。要するに、始まりがやや唐突であっただけに、当初想定されていたような「永遠の金字塔となる図書館を京都に残す」という結末には至らなかった。以下に、その変転を記録しておく。

4-1 表「I」「クルーガー図書館」時代（一九四六年一月二三日～九月三〇日）

創設からの八ヶ月は、「協力会」が主要メンバーで財団法人クルーガー図書館を単独で経営しようとしていた時代である。前述した通り、開館式の時点では、①場所はどこになるのか、②資金面での手立てはあるのかの見通しは立っていないかった。

- ① 設置場所に関しては、開館式の式辞の中では誰も言及していない。唯一ヒントになるのは、有賀日記にあった「場所は華族会館に置かれる予定」だけであったが、その裏付けとなる資料が、次の二冊『華族会館の百年』と『霞会館「京都支所」のあゆみ』の中に見つかった。¹¹⁾ともかく、「日独会館」の使用が不可能になり、

銀行員クラブとの交渉もうまくいかなかったのか、進駐軍側は華族会館という場所の確保に力を貸したのである。

② 次に、経営を委ねられた「協力会」にとって、もう一つの重要課題は資金面の見通しだったが、そこに救世主として現れたのが、慈善団体「原田積善会」^⑬であった。直接的には、難波紋吉が友人の紹介で、富山房社長坂本守正（積善会理事）と知り合い、彼の斡旋でことが進んだようであるが、浅沼資料の中には原田積善会宛「寄付申請書」^⑭（昭和二年五月一六日付）が保存されており、その時の事情がよく分かる。

その結果、七月三十一日に百万円の助成が受けられることになり、それを基に八月七日には京都府から財団法人設立の認可が下り、ようやく財団法人クルーガー図書館がスタートラインに立つことができた。

設置時に届け出られた「財団法人クルーガー図書館寄付行為」の中で、クルーガー法人と「協力会」との関係は

第十四条 本法人に左の役員をおく。理事一三名以内 監事二名以内

第十五条 理事一名以内及び監事は京都国際文化協会より、理事二名以内は財団法人原田積善会より推薦す

により、明確に規定されている。この時点で「協力会」より財団法人クルーガー図書館の理事に選ばれたのは、大澤善夫・汐見三郎・今尾登・難波紋吉・大塚一朗・大澤幸恵・森川正男の七名であり、原田積善会からは上田正二郎・坂本守正の二名であった。理事中、四名が同志社関係者である。この一ヶ月後に、原田助元総長三男の

淳^{すなお}が事務員（主任）として入った。

以上のことから、この時期、クルーガー図書館は「協力会」独自の事業として進められていたことが分かる。しかし、クルーガー図書は華族会館に置いたままで、公開・利用はまだ出来ていない。

4-2 表「I」「CIEクルーガー図書館」時代（一九四六年一〇月一日～一九四九年三月一五日）の前期

同志社本部で開所式をしてから八ヶ月後に、クルーガー図書館はやっと実質上の開館の日を迎えた。この日の記事は新聞紙上でも写真入りで報道され（例えば、予告として都新聞は四六年九月一日と二九日、京都新聞は翌日四六年一〇月二日など）、華やかなスタートであった。この後の二年五ヶ月（前期）は、第一軍団CIE（Civil Information and Education Center）と「協力会」（四八年二月まで）が、残りの一年一ヶ月（後期）は、京都軍政部CIEと「クルーガー財団」（四九年三月まで）との共同経営時代となるのであるが、前期と後期では共同経営者（組織）の交替によって大きな変化を経験した時期となった。

前期は、CIE課アンダーソン氏の下で、一九四六年十月、進駐軍接收中の、中京区四条烏丸東入日本生命ビル分館で華やかな開館式を迎え、場所もよし、蔵書も豊富、さらに次々と新しい洋雑誌や書物が補充されるといふ最高の条件で、一般市民のための理想的「街の民主的図書館」としてオープンしてからの約一年間である。この時期の記述は、紙数の都合もあり、CIE活動長年の研究者、今まど子による研究（「京都にクルーガー図書館があった」、「CIEインフォメーション・センターの活動」）に委ねる。

前期の終りの予兆は、一九四七年一二月にCIEクルーガー図書館が第一軍団CIEから京都軍政部CIEに移管され、ケーズ（E. R. Cades）⁽⁴⁾、続いてマックファーランド（Bernice MacFarland）課長と代わったことに

端を発する。もともと軍政部側の組織変更によることであつたが、その変更により両者の関係が微妙に変化して共同経営が必ずしも上手くいかなくなつたようである（今 七八）。移管に先立つて、同年十一月の理事会では大澤理事長の辞任承認、四八年二月の理事会では京都国際文化協力会との関係切断の件（可決）が議せられてゐる（浅沼資料）。こうして、京都国際文化協会がクルーガー図書館の運営に携わる時代は終わったのである。

III クルーガー図書館のその後と浅沼園子

前節までは、クルーガー図書館と「協力会」との関係が一九四六年一月二三日に始まり、一九四八年二月に公的に終了するまでを追つた。本節では、「協力会」とは入れ替わりにクルーガー図書館と深い関係を持つことになる、浅沼園子の活動を軸に、後半期のクルーガー図書館の変遷についてまとめていく。

1 浅沼園子の生い立ちと結婚―クルーガー図書館に勤め始めるまで

1-1-1 園子の家族

園子は一九一〇年八月二五日に大阪の船場（中央区備後町四丁目三五）で、小林政治（号は天眠 まほる 一八七七一―一九五六）と（植田）雄子の四女として生まれた。まず、園子が生まれ育つた小林家について、特に父・天眠の娘に対する教育方針を纏めておく。

小林政治（天眠）は一八七七年兵庫県生まれ。一八九二年、県立姫路中学三年生のとき病気のため退学、翌年一七歳で大阪の西村喜八商店（毛布問屋）で丁稚として働き始める。元々は文学青年であり、丁稚生活を続けな

がらも結婚するまでは次々と作品を公表していたが、その後は執筆活動を断念し一家を養うことに専念する。先ずは、一八九九年二三歳で毛布卸商を立ち上げ、さらに二〇年後の一九一九年には大阪変圧器株式会社（ダイヘン）を設立した。彼の商才と時流を見る目の確かさにより、自ら立ち上げた二つの会社は大成し大阪では有名な実業家となった。一方、自分は果たせなかった文学の道の後援者として中村吉蔵や与謝野鉄幹・晶子夫妻を生涯、物心両面で支えたことはよく知られている。また文化学院創立者の西村伊作とも親交があり、文芸愛好者のための出版会社「天佑社」も立ち上げた。

生涯、天眠の生活を貫いていたのは、質実剛健かつ義理人情を重んじ誰に対しても誠実という生き方だった。また、丁稚時代に梅花女学校や浪花教会のバイブルクラスに通ってコルビー宣教師（A. M. Colby 1847-1917）から英語を学んだこともあったようだが（『毛布』一七九）、宮川経輝の牧する大阪基督教会の「舟場伝道」の際に、家庭訪問伝道で小林家を訪れた森山寅之助副牧師の「崇高な人格に傾倒して」受洗したことも明かしている。（『毛布』三五―三七）

天眠と（植田）雄子夫妻は一男六女に恵まれた。上から、安也子・美弥子・迪子・基治・園子・千賀子・章子である。天眠は、家庭では大変な儉約家であったが、教育熱心で男女の別なく子どもにも教育の機会を与えた。一九二二年までは会社のある大阪に住んでいたのですが、上の娘三人は大阪で高等女学校を卒業させたが、京都に居を移してからは女の子は全て同志社女学校で学ばせた。

引越しの動機は、次女美弥子と三女迪子が同志社女専に入学した一年後に、四女園子も同志社高女部へ入学したからで、まさに「孟夫（毛布）三遷」の実行であった。美弥子の女専英文科卒業は一九二五年、迪子は二六年、園子は三二年であった。身体の弱かった五女千賀子は同志社高女部（二九年）で終了したが、六女章子は高

女部（三三年）と女専英文科（三六年）の両方を卒業した。娘五人の内四人まで同志社女子部で高等教育を受けさせたことになる。

さらに、次女的美弥子が同志社女専を卒業する年に、突然、卒業後は英国に留学させて欲しいと言った時は、天眠にとつて、「京都移住後の数カ年は家庭生活に於て最も物的に苦慮した時期であった」（『毛布』九〇）にも関わらず、美弥子の願いを聞き入れてロンドンの University College に留学させた。また翌年同じく同志社女専を卒業した三女迪子も、引き続き同志社大学英语文科に進学させた。しかし天眠にとつて、女性の高等教育はあくまでも教養のためであったので、美弥子は帰国後、原田助総長の次男泰と、迪子の場合は与謝野夫妻の長男光と、同志社大学を中退して結婚させた。

さらに、四女園子、五女千賀子、六女章子に「子どもの自由詩」（もともと姉たちが書き止めて、『赤い鳥』に投稿）の才能があると思うと、天佑社から『星の子ども』を出版した。序、与謝野晶子 跋、北原白秋と西村伊作という豪華版であった。

小林家には、自宅に教養人が集うという文化的環境があつたし、子供が六年生になると夏休みの一ヶ月間は東京で過ごし見聞を広めさせるという習慣があつた。天眠には自分が出来なかつた学問、文学、教養の備わつた体験を、結婚前の娘たちに味あわせたいとの願いが強かつたのである。

1-2 園子の生い立ちと結婚

園子は、たまたま一年違いで生まれた妹、千賀子が誕生時から病弱だったので、赤ん坊の時に母親から離され、祖母に育てられたこともあり、寂しい幼年時代を過ごした。その上、天眠が後援していた中村吉蔵（春雨）夫妻

には子供がなかったので養女にと望まれ、同志社高女部の三年生を終えると両親の許を離れて東京の吉蔵宅で同居を始めた。吉蔵は既に母校の早稲田大学でギリシャ劇や近代劇を講じながら意欲的な戯曲を発表し、イブセンの日本への紹介者として名を挙げていた。

東京に移ると、園子は女子学院に編入学し、一九二八年に卒業後は日本女子大学校に進学していた。しかし、女子学院時代から吉蔵は頻繁に築地小劇場に園子を連れて行き、園子自身も将来は新劇女優への道を考えていたことが分かると、父は即座に京都に連れ戻した。自分の希望ではなく、親の意思で進路が決められてしまうことに対して、園子の父への思いは頑なになっていった。

京都に帰ると園子は同志社女専英文科に入学するが、その年の五月一九日、京都教会で中井佐一郎牧師より受洗した。同志社と女子学院でのキリスト教の学びもあっただろうが、一日も早く親から独立して生きていくための支えを必死に求めていたのであろう。高等教育を受けたのちは「家柄、学閥、財力」を基に結婚という姉たちの生き方ではなく、卒業したら家を出て自活することが夢であった。三年後の卒業時、園子はガデルス商会から「男性の給料が百円の時、園子さんには二百円出す」と言われて、やっとその時が来たと喜んだ。しかし再び、父に「女の子に仕事は要らない。行くな」と否定され、園子の気持ちはますます親から離れ、親に対する不信任感を募らせていった。状況を心配した女専時代の恩師グイン宣教師 (A. E. Gwin 1896-1969) は、学費・生活費は一切不要でミシガン大学留学の道を紹介してくれたが、それもダメと言われ、結局、一年間家事手伝いをして過ごした後、園子は不満を抱いたまま同志社大学英文科に進学した。そこで、一年も経たないうちに、ESSで知り合った法学部の貧乏学生浅沼和也と恋愛し、翌年満州鉄道に就職する彼との結婚を決めた。父はもちろん不本意だったが、就職や留学と違って娘の結婚を辞めさせることは出来なかった。

一九三四年三月二六日に和也と結婚式を挙げ新婚旅行を兼ねて渡満して十年、満州での生活は五人の子宝にも恵まれ幸せだった。しかし一九四四年、夫が現地召集され、敗戦間際のソビエト軍の参戦、夫のシベリア抑留の結果、二歳から十歳までの子ども五人を連れての帰国時の苦労は、女中と一緒だったとはいえ、当時の引き揚げ者みなが体験したように、命がけだった。特に夫のいない家族は日本政府から正規の引き揚げ者とみなされず、引き揚げ船に乗るまでには特別の苦労があったという。

一九四六年九月にやっと帰国、幸い両親宅に落ち着くことはできたが、衣食住窮乏の中、すでに両親の家で暮らしていた他の兄弟の家族との共同生活にも疲れ果てていた頃、ちょうどクルーガー図書館での主事の仕事を回ってきたのである。社会に出て働くことは、園子にとって若い時からの夢でもあったし、五人の子供を養うためにも働いて収入を得る必要があった。園子にとって、独立して間借り暮らしを選ぶ絶好の機会となった。

2 クルーガー図書館の変遷(下)

2-1 表「Ⅰ」「CIEクルーガー図書館」時代(一九四六年一〇月一日〜一九四九年三月一五日)の後期

園子がこの職を得たのは、原田助同志社元総長の次男泰と結婚していた姉美弥子の伝手もあっただろうが、原田家の三男、淳が体調を崩し退職しなければならぬという事情もあった。一九四八年九月二〇日の理事会で、「原田主幹事務代行者として浅沼園子が選任」され、次回一月一三日に開かれた理事会には園子が主事として出席している(浅沼資料)。

この時は前述のように、CIEと京都国際文化協会の共同経営は既に破綻しており、一九四八年度に新しく制定された財団法人クルーガー図書館の寄附行為には、役員中、理事一二人以内の構成は、①二名は原田積善会

②七名以内は京都軍政部民間情報教育課の推薦に基き理事会で選任、③理事三名以内は理事会で選任と定められた(浅沼資料)。理事会で選任された三名に、有賀鐵太郎・奥村竜三・堀内清の同志社関係者が入っていたが、主流を占める七名が京都軍政部民間情報教育課の推薦者、という点で、これまでと性格が大きく変わったことが示されている。不運なことに、園子がクルーガー図書館に職を得た四ヶ月後の一九四九年三月一五日には、クルーガー図書館は日本生命ビルから追放されることになる。

占領軍との力関係を想起させる出来事であるが、この時期の切迫した雰囲気は、浅沼資料の中に一冊残っているA5版の大学ノート(表紙には、無地の紙カバーがついており、鉛筆で「事務日誌」財団法人クルーガー図書館とある。後半の記述が浅沼園子)にリアルタイムで描写されている。

一九四九年二月二一日(月)「この日溜池「英雄」氏「京大出身 CIEクルーガー図書館司書 四八年八月一四九年三月」、M・G(軍政部)と呼ばれ、午後一時帰館。三月一五日を期して、軍政部より独立させるべき申し渡しがあった旨、伝え聞く。早速、有賀理事長に連絡しに行く

とあり、クルーガー財団にとって青天の霹靂的通告があったことが分かる。三日後の二四日、「堀内「清」先生よりお電話で西村「精一」府図書館長に「有賀」理事長が会われるべく連絡されたしとのこと。ご多忙中、お心にかけていただくことを感謝」と書きつつも、クルーガー図書館の行き先はまだ不透明であった。

結局、占領軍の意向に抗うすべも無く、三月九日には緊急の理事会を開き、

*三月一五日を限りに図書館閉館、*三月三一日限り他の建築物へ移転(書籍の疎開)

*財団事務所のみ残置、財団事業は継続、と決まった（太字、坂本）。

園子は翌十日に結果を伝えるに西村館長を訪問し、「最悪の場合の保障を約束していただき、大いに喜ぶ」と一息つきつつも、図書館閉館の決議には心が痛んだ。

そのような事態の中でも、事務所ではY M C A（会館）で定期的に開催していた映画会や「家庭婦人の会」の講師Hessie夫人を迎えての婦人会行事は平常通り実施していたし、同時に引越しに向けての作業も、進めたいかねばならなかった。一方、「一五日限りで閉館」の告示をすると、図書館利用者からは「何故閉めるのか」「淋しい」との声が上がるし、新聞社からは発表範囲の確認があるなど、その応接に多忙を極めた。しかし、何よりも急を要する図書の片付けに精を出した。

そういう混乱の最中の一五日、府庁に財団報告書を提出に行った際、共に満州生活の体験者として親しみを感じていた、府庁の文書課長大佐三四五（後出）と面談し、少しずつ心の落ち着きを取り戻しかけていた一七日に、大佐が来館、「格好の移転先（京大図書館）が見つかった、公開希望も叶い、独立の立場で使用できそう」との朗報を伝えられた。早速有賀理事長宅に向いて報告し、やっと希望を見据えつつ、図書の整理に精出す日々が続いた。正式の理事会決定は、移転直前の三月二八日となったが、それに合わせて寄付行為の改正も行なった。

いよいよ引越し当日の三月三二日には、クルーガー図書移転のため、S C A P（Supreme Commander of the Allied Powers）の好意により、中型トラックと労務者二名のサービスを受けることができたのだが、これは全てアンダーソン氏の手配によると分かった。財団でも手配していたアルバイト学生四名とトラック往復六回で、なんとか図書を京大附属図書館長室に納めることができ、園子にとって肩の重荷を下ろせた一日であった。

2-2 表「Ⅲ」京都大学附属図書館内クルーガー図書館時代（一九四九年四月一日～一〇月三十一日）

さて、日本生命ビルを追われたクルーガー図書館が京都大学に迎えられたことは大変な幸運であったが、この際の陰の功労者は大佐三四五でないかと筆者は推論する。以下に、その根拠となる、彼の略歴を紹介する。

おおさみよこ
大佐三四五（一八九九―一九六七）は一九二一年三月に同志社大学英文科を卒業、四月から満鉄本社大連図書館

で、司書係主任として働き始めた。一九二四年には社内では実施された海外選抜試験に合格し、一九二五年から三カ年渡米、一九二七年コロンビア大学図書館学部でBA、一九二八年同大学院でMAを取得し、満鉄の図書館に復帰。約一五年大陸に居住し、一九四二年に日本へ帰り、東京で文部省図書館講習所講師を務めた。そして、戦後は京都に戻り、

一九四七年六月～八月 第一軍団近畿軍政部顧問、民間情報教育監察官兼京都CIEクルーガー図書館長

四七年九月～四八年八月 京都府社会教育課長

四八年九月～四九年八月 京都府総務部文書課長

四九年九月～六一年 京都学芸大学図書館事務長

その間、四八年五月～五〇年三月 京都大学文学部講師（図書館学）

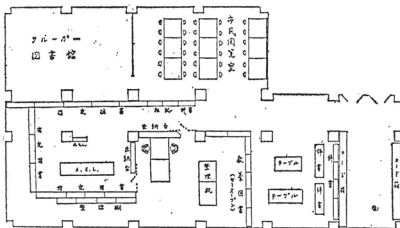
を務めた（谷口 二一四―五）。この経歴に照らして、クルーガー図書館の京都大学への移転の時期を考えると、それは彼が京都府総務部に勤務しつつ京都大学で図書館学の講師をしていた一九四九年四月と重なることが分か

る。(なお園子は京都大学に移転してから開館までの準備期間中に、大佐の勧めで「図書館学」を聴講している。事務日誌一九四九年五月一日)

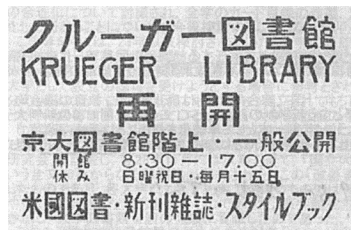
移転後すぐに開かれた第二一回理事会の記録では、四月一杯を整理及び準備期間とし、五月上旬には開館し一般市民にも公開するはずだったが、実際に開館したのは六月三〇日となった(『六十年史』五五)。「京都大学附属図書館六十年史」には、「クルーガー図書館再開のポスター」(五五)と、「図書出納室平面図 昭和二十四年六月」(一七四)が記載されており、平面図の一隅には「クルーガー図書館」と書いたスペースのある図面が掲載されている。その時のクルーガー図書館の図書数は、「洋書九七八冊、和書七七〇冊、他にポケットブック(洋書)、購入雑誌約三〇種、新聞五種、寄贈洋雑誌数種で、利用者は一日平均一〇〇名から一五〇名」であったと記録されている(五六)。

しかし、当初総長宛に建物使用願いを提出した時は一カ年契約だった(浅沼資料)のだが、なぜか急に十月三〇日をもって四ヶ月で閉館となった(五六)。閉館から半月も経たないで開かれた第二六回理事会決議録(一九四九年一月一日)によると、「今般本財団法人事業である図書館経営が財政的に困難で、その目的を遂行することが不可能」になったので解散するが、『クルーガー文庫名』は保存し、「公共性は持続」することを条件に、京都府に指定寄付をし、本財団の目的である社会教育事業を府に移譲の上、解散を決議(解散の清算人は有賀・堀内・奥村)した(浅

クルーガー図書館の創設と存続に貢献した同志社人たち―京都国際文化協力会と浅沼園子―



図書出納室平面図 昭和24年6月
『京都大学附属図書館六十年史』p.174



クルーガー図書館再開のポスター
『京都大学附属図書館六十年史』p.55

沼資料」とある。短期間ではあったが、この間の移譲は順調であったとも読み取れる経緯である。

しかしながら、そこに到達するまでに一悶着あったことが、都新聞の記事（一九四九年八月二十九日・八月三十一日）により明らかになった。すなわち京都大学への移転を済ませ、開館して二ヶ月後に再び運営資金減から雇い人に支払う給料のめども立たなくなったらしく、その記事が一九四九年八月二十九日の都新聞紙上かなり大きく取り上げられた^⑤。その後半部で「クルーガー図書館のようなのが京都にはどうしても必要です。随分努力しましたが、今では前途の希望も持てません。しかし私は最後までクルーガー図書館と運命を共にするつもりです」と健気に語る園子の心情に触発されてか、翌々日（三二日）の新聞には、「再建は私らの手で、クルーガー図書館（本紙既報）に明るい申し出」という見出しの下に、「京都非戦感謝の市民運動」発起人会から、「目下河原町四条に建設中の後楽会館に移転して再建したい」との申し出が掲載された。新聞記事は「この申し出に対してまだクルーガー図書館側では意思表示はしていないが」で終わっている。この一連の記事に一番驚いたのは、財団の理事たちでなかっただろうか。

2-1-3 表「IV」 「V」 京都府社会教育課主管「クルーガー図書館」時代（一九四九年二月一日～五一年五月）

一九四九年一月一日にクルーガー図書館の行く先は決まったのだが、それから一年半弱、実際に一九五一年五月に上京分館ができて、そこに収まるまでのクルーガー図書館の扱いはどうだっただろうか。この間のブランクを、『都』『京都』両新聞記事と『京都府教育便覧』昭和二五年度から補っておく。

一九四九年二月一日、それまで消息の分からなかった園子の夫・和也がシベリアから舞鶴港に復員して来た。この日の喜びを、都新聞は「クルーガー図書館、浅沼園子さんに」歓びの二重奏」と題して、園子と五人の

子どもたち全員の写真入りで報じている（一九四九年二月一日）。その記事には、もう一つの見出し「『異国の丘』から夫帰る―心配の図書館は府の経営に―」が付いており、記事には「閉鎖一步手前まで追いつめられていたクルーガー図書館が、園子さんの必死の努力によって、府が経営することになり、日も同じ一日、川端丸太町の奥村女子会館へめでたくおちついた」とある。この記事から、一〇月三〇日に京大附屬図書館を封鎖した後の、クルーガー図書館の書物の保存先が判明した。

ところが、一二月一四日の京都新聞誌上には、「ワタシは知りませんよ」府教委の計画に婦人団体が物言い」という見出しで、「府教育委員会では閉鎖されたクルーガー図書館から寄贈を受けた図書で、正月早々奥村女子会館内にクルーガー文庫を作ろうと準備を進めている矢先、京都の婦人団体からモノ言いが入ろうとしている」「奥村女子会館を婦人団体以外の人に使うことは会館開放の趣旨に反し」「然も文庫設置については一言の相談もなしに決める事は怪しからん」とのクレームが入ったことが報じられている。

次に、『京都府教育便覧』昭和二五年度を見ると、昭和二四年度管下公共図書館一覧の中に、「京都府立クルーガー図書館 上京区「当時」小山南大野町 社会教育課主管」と記載されていることから、上記クレームを受けて、昭和二四年一月から二五年三月までの間に、クルーガー図書は、奥村女子会館から小山南大野町にあった京都学芸大学の同窓会館「紫郊会館」^⑥に移されたことが分かる。ここでも、一九四九年九月から大佐が京都学



都新聞 昭和24年12月11日
[クルーガー図書館浅沼園子さんに]
歓びの二重奏

芸大図書館事務長に赴任していたことが有効に働いたと考えられる（八八頁大佐略歴参照）。

また、同書の「京都府教育委員会部課の事務分掌」において、社会教育課の項に「15 クルーガー図書館に関すること」、「16 奥村女子会館に関すること」が明記されていることから、府立図書館の上京分館が設置されるまでの約一年四ヶ月は、社会教育課の主管で、クルーガー図書館という名前で存在していたことが分かった。（二五年度の名簿では、浅沼園子は社会教育課の、そして二六年度では府立図書館の「雇」に、二七年度以降は図書館の「主事補」になっている）

これは、浅沼資料の中に残されていた英文チラシ（口絵参照）の内容とも合致する。チラシは表裏共に英文であることから、英文の図書雑誌の寄付を求めるとのできる人に宛てたものと考えられる。表はカラー刷りで満月の夜の三重の塔周辺が描かれており、「WHAT IS the Kyoto Prefectural KRUEGER LIBRARY」と題字がある。そして裏面には、クルーガー図書館の由来と現在の蔵書数「英書2715冊¹⁵⁾、邦語770冊、雑誌36種類のうち4種は英文」が標記され、こんな小さな図書館であるが、名前はよく知られており、利用度も高い図書館なので、今後さらに蔵書を増やして市民に役立つ図書館にしたい、と抱負が書かれている。しかも日本の民主教育に役立つ、英語の本が望ましいので、当図書館を思い出したら送ってほしい、雑誌なら読後でもいいと、主として英書及び英文雑誌を集めようとしていることがわかる。この分館をスタートするにあたり、特色ある府立クルーガー図書館として発展させたいとのチラシ作成者の意図が伺われる。

2-4 表「VI」「VII」京都府立図書館「クルーガー文庫」時代（一九五一年五月―五日）現在

結果として、府立クルーガー図書館として独立することはなく、正式にクルーガー文庫としてお目見えするの

は、上京分館が一九五一年五月一日日に開設された時であった。幸い浅沼資料の中に、京都府立図書館が各新聞社に「記事掲載方御依頼」を発送した写しと、その半月後にクルーガー図書館時代の協力者に出した案内状が残っていることから、両者の引き継ぎの経緯が明確になった。

① 新聞社に記事掲載方御依頼

「五月十五日より上京分館開設」というタイトルで、府立図書館はこれまで「本館よりの遠隔地 伏見、河原町、宮津町、峰山町、綾部町の五分館を設置して来たが、今回更に上京方面の利用者のために上京区小山大野町の紫郊会館内に上京分館を開設することになった。当分は学生用参考書をとり揃え漸次一般の図書に及ぶ予定である（中略）。尚従来紫郊会館にあったクルーガー文庫は上京分館に併設され一般の閲覧に供することとなった」と記されている。（太字、坂本）

② クルーガー図書館時代の協力者宛

①の半月後に、差出人は京都府社会教育課 荻野二郎と京都府立図書館 西村精一の連名で、日時一九五一年六月一日午後二時―四時 場所は紫郊会館内で開催、との案内状である。文面は「クルーガー図書館が府教育委員会 社会教育課に委ねられましてより 早くも一年半近くなりましたが、今般一層の発展を期するために、京都府立図書館の経営に切り換えられ、去る五月十五日より開館経営」していること、利用者にも大層喜ばれているので、その状況を報告方々、今後のご協力を得るために、何卒ご来館を、という招待状である。（太字、坂本）

この二通の書簡からも、正式に「クルーガー文庫」として、府立図書館に収められるのは、一九四六年一月二三日から数えて五年四か月後になることが判明する。

この五年後、紫郊会館は別の用途（京都和装学園）に使われることになり、一九五六年五月、上京分館は北区等持院東町の日本画家・木島櫻谷旧宅に移る。それから一九七六年五月の上京分館閉館までの二〇年間、「クルーガー文庫」は上京分館に配置され開架図書として利用された。しかし時代の趨勢もあり、分館は主として地域の住民や近くの高校生の勉強場所として利用され、「クルーガー文庫」のかつての存在理由は徐々に薄れていった。そして現在「クルーガー文庫」は、府立図書館（左京区岡崎成勝寺町九）で継続保管され、今は歴史資料として役立っている。園子は、上京分館を退職するまでの十年弱、府の職員として「クルーガー文庫」とつながりを持ち続けたのである。

園子にとって、自分の足で立って自活して生きることは若い頃からの夢であり、それが実現したのが戦後の混乱が続いている最中の昭和二三年であった。その時のクルーガー図書館は経営困難の時期であり、初めての職場で次々に襲い来る問題に戸惑いつつも園子は果敢に取り組んだ。時には無謀と思える手段に訴えつつ、生来の負けん気と同志社で学んだ「個儻不羈」^{てきとうふき}の精神で一つ一つの問題に必死で対応した。

だからこそ、実質上のクルーガー図書館が消滅した後も、その時の記録を個人的に大切に保管しておきたいと願ったのであろう。⁽¹⁸⁾

おわりに

以上、一九三二年に同志社女専英文科を卒業した浅沼園子との出会いに始まって、敗戦直後の京都の街に、いち早く出現したクルーガー図書館を調べていくうちに、その創設に尽力した「京都国際文化協力会」のことを知り、それに関わった同志社および同志社人の働きを調査するに至った。その結果、クルーガー図書館の経営を最初に引き受けたのが、同志社の卒業生を主にした団体「京都国際文化協力会」であり、有賀鐵太郎・堀内清・奥村龍三がクルーガー財団解散の清算人となり、おそらく大佐三四五が京都大学や紫郊会館への移転に関与し、浅沼園子が退職まで共にあった経緯を跡付けることができ、クルーガー図書館と同志社関係者のつながりが深いことが判明した。

今回の資料紹介の成果は、①クルーガー図書館立ち上げに尽力した「京都国際文化協力会」の存在を同志社の戦後史の中で明らかにしたこと、②クルーガー図書館が創設されて以後の浮沈の歴史を、府の文書に目を通し、当時の新聞記事を援用し、同志社と関連させながら調べ上げたこと、③クルーガー図書館の維持発展に寄与した浅沼園子という個人のはたらきとその背景をさらに追求したことであろう。

浅沼園子が大切に保存していたクルーガー関係の記録や資料があったからこそ、混沌としていた戦後の一時期の京都の歴史が浮かび上がったのである。それらを惜しみなく貸してください、何度も質問に応じて下さった遺族の方々に心から感謝し、この拙論を故浅沼園子に捧げたい。

(注)

本文中に「浅沼資料」と記述している箇所は全て、中岡百合氏よりご提供いただいた、故浅沼園子所有の資料である。

(1) 京都に最初に到着した占領軍部隊「米太平洋洋軍第六軍」のことで、クルーガー大将を司令官とし、戦争末期、日本軍と戦闘を繰り返した後、フィリピンから直行した実戦部隊のこと。

(2) アーモスト館が本部として使用されたのは、一九四二年六月一六日から四九年一月二日まで。その間の事情は北垣宗治『新島襄とアーモスト大学』(山口書店 一九九三年 五六四―五六六) および田中良一「われわれの歴史」(アーモスト館二十周年パンフレット 一九五二年 一二―一四) に詳しい。

(3) 同志社理事會記録 一九四五年一〇月三日。因みに、戦時中の理事會記録で残存しているのは、一九四五年五月二八日に開かれたものが最後で、六・七・八月と、戦後九月の開催の記録は見当たらない。

(4) John Jay Schieffelin (一八九七―一九八七) 米第六軍軍政部長海軍中佐。J・J・シーフェリン中佐に関しては、有賀鐵太郎の協力を得て「京都の新教育勅語草案作り」を主導したが、鈴木英一『日本占領と教育改革』の中で詳述されている(一〇八―一二六)。「敗戦直後の京都・新教育勅語構想―有賀鐵太郎とシーフェリン」(『季刊教育法』四三、九二―一〇三、一九八二年四月)も参照。

(5) 熊谷直之(鳩居堂当主)の五男直忠(大正二年二月生れ。三高・ギルフォード大卒)か?

(6) 拝啓

私が一九四五年十月から一九四六年一月までに日本人聴衆諸君のために述べた十三の講演の記録を御返送いたします。

この講演集に、標題と序言を添へて出版することを貴学に許可し、私は著作権を譲渡いたします。時々この書物の売れ行き状況をお知らせ願ひ度く、尚見本を数冊お送り下され度く存じます。

早々

米軍海軍中佐 ジョン・ジェイ・シーフェリン

米国ニューヨーク州ニューヨーク市

東七十一番街二一―番地

(『新しき国家』グラビア頁)

同志社大学 御中

(7) 三好康之(一八九八一—一九八九)父三好康親は広島地裁判事、兄三好康方は海軍機関大佐。本人は、広島高師附中を経て、大正六年陸士入学、八年卒。その後ずっと軍人生活を送り、戦後、西部復員連絡事務局長(Liaison Officer of the Western Demobilization Bureau, Kyoto)として昭和二〇年九月—二一年二月の五ヶ月間、京都に在任していた。当時は少将。著書に『歴史の思想体系とその教訓』上下(私家版 昭和五三年)がある。敗戦後は占領軍が日本の政府機構をそのまま利用して占領行政を行う間接統治が実施されており、占領軍と日本政府との窓口として終戦連絡事務局が置かれ、英語の堪能な人々が集められていた。

(8) PRESIDENT YOSHIO OSAWA

OF

KYOTO CITIZENS SOCIETY FOR INTERNATIONAL CULTURAL COOPERATION

CORDIALLY REQUESTS THE HONOUR OF YOUR PRESENCE

AT

THE DEDICATION

OF

KRUEGER LIBRARY

TO BE HELD ON WEDNESDAY

JANUARY THE TWENTY-THIRD

AT

THE ADMINISTRATION BUILDING

DOSHISHA UNIVERSITY

TWO O'CLOCK

(浅沼資料)

(9) この度、有賀鐵太郎氏令息の誠一氏のご厚意で、京都大学文書館に寄贈されている未整理の有賀鐵太郎日記に目を通すことができた。氏の許可を得て、関連部分のみ引用。

(10) 「今論考」では、一九四九年十月三〇日までの三年九ヶ月とされているが、今回、丹念にクルーガー図書館の消長を辿った結果、

クルーガー図書館の創設と存続に貢献した同志社人たち—京都国際文化協会と浅沼園子—

クルーガー図書館と名乗っていたのは五年四ヶ月弱と判明した。(本稿参照)

- (11) 終戦当時、「華族会館京都分館」は上京区今出川通烏丸東入、旧徳大寺邸にあった(現同志社大学図書館の位置)。(1)華族会館本館「庶務日誌」の中に「分館の一部は目下進駐軍の図書室に接収せられ居る」の一行がある(霞会館「京都支所」のあゆみ」六)。(2)同じく昭和二年一月二日の記録に、「分館建物約半分を今般京都進駐軍」より「本月下旬頃より暫定期間無償使用し、たき旨申入あり」：「進駐軍に於いても慎重に考慮の結果特に知事を通じて穩便的に申入れ」しているのだから、「直接強制使用の態度に出るやも計り難きを以て、此際なるべく穏やかに交渉を結びたし」(同書 二三)と書かれている。最初の記事は「華族会館京都分館」の中にクルーガー図書館用の図書が置かれていたことを暗示しているし、次の記録は、京都の分館長に進駐軍の意を受けて京都府知事が直接面会して頼んでいるのだから、拒否はあり得なかったことを示している。結局、一月に部分接収の後、同年八月には全館接収されることになったのであるが、日誌の中の、申入れ日の「一月一日」といい、暫定使用期間が、「本月下旬頃より」というのも、クルーガー図書館開館式を念頭においての交渉だったと推察できる。(太字、原文)

なお、一九四七年の新憲法施行に伴い、華族制度と貴族院が廃止されたのに伴い、「華族会館京都分館」は「霞会館京都支所」と改称された(『華族会館の百年』一五八―一六〇)。

- (12) 財団法人積善会は、大正九年以降、創設者原田二郎の下、最初は主として中産階級に属する品行方正の帝国民の保護救済を目的としていたが、徐々に対象を広げて国内外の社会事業家の助成を続け、昭和一〇年、満一五年を迎えた時には、助成金総額一千万円を突破する事業に成長していた。そして戦時中も社会事業に重点をおいて助成を続けており、終戦後はいち早く寄付行為を民主的に改定して新発足していた。その原田積善会の寄付行為第四条一三がクルーガー図書館事業にびつたり当てはまるので、「学芸技術の面では京都に最初進駐したゆかりの深い米第六軍司令長官であったクルーガー大將を記念し併せて日米両国文化の交流を助長するを目的とするクルーガー図書館創設費として百万円年賦助成することにし、この年五十万円を：助成した」と『原田積善会三十年小史』(六四)に記述されている。

- (13) 寄付申請書は京都国際文化協力会会長大澤善夫とクルーガー図書館館長難波紋吉連名で申請されている。昭和二〇年九月の「協力会」設立以来、第六軍および京都府庁・市役所と協力関係を築く中でクルーガー図書館運営を委託されたこと、そのような図書館を、「戦乱も終結を遂げた今日」「民衆の斯かる意欲と運動に対し指標を与うべき世界的視野における文化政策こそ望ましく、殊に著しき遅れの状態にある図書館事業」を京都でスタートする重要性を訴え、資金援助の要請をしている。

(14) E. R. Cates 京都市民の間では根性悪の意味で「イケーズ」と仇名され、京都教育界に大騒動を引き起こしていた（西川祐子「古都の占領―生活史からみる京都一九四五―一九五二」平凡社 二〇一七年 五七）

(15) 見出し語は大きく「クルーガー図書館 最後の運命迫る：かけに浅沼女史の涙ぐましき努力：」とあり、園子の顔写真も出ている。夕刊の新聞記事なので、多少ともセンセーショナルになるのは仕方がないとしても、「そのユニークな存在を市民から親しまれてきた」クルーガー図書館が、「今年初めから次第に経営が苦しくなり：CIE図書館内にあつたのを閉館してからは蒨の道を歩み続け：やっと京大図書館の一隅に落ち着いたものの苦しさは増すばかり」。今や「財団基金七〇万円も残りは僅か三万円程度：ついに運命は旬日に迫った」「従業員も創設当時の十数名から今では浅沼園子さん（三八）ほか一名の事務員がいる」だけが、浅沼さんは経費を極端に切りつめ、月一万五千円の中から図書館人と二人の給料を賄っている状態だ」と、ある意味、内部情報が暴露されている。

(16) 一九三二年竣工時は「紫明会館」と命名されたが、戦後、同窓会名の変更と共に一時的に、「紫郊会館」となり、現在は再び「紫明会館」に戻っている。（『京都学芸大学開学一五周年誌』一九六四年 一一七―一一九）。

(17) 京大時代に比べて、英書が三倍増になっているのは、もともと一番多かったとされるポケットブックがこの数字の中にカウントされているのだろう。

(18) 新聞にまで報じられた、クルーガー図書館に対する浅沼園子の献身的活動について、ご家族の思い出を基に、その理由を推し量ってみた。園子がクルーガー図書館と特に深く関わったのは、働き始めての一年間と、京都府社会教育課管轄で、府立クルーガー図書館として紫郊会館でオープンしていた一年半足らずの期間であった。その期間はまた戦後の混乱期であったが、逆に、個人としての働きが許容される範囲が大きかったのかもしれない。家族の話によると、園子にとってそのあとの十年弱は、府立図書館員として地位は安定したものの、大きな組織の中で、女性の地位向上を目指しての要求が認められにくかった面もあったらしい。

園子が働き始めた一年間は、クルーガー図書館にとって一番試練の多い期間だったが、彼女のように反骨精神と負けず魂を持つた人間には、試練が多ければ多いほどやる気が出てきたのかもしれない。規模も小さく資金面も潤沢でない図書館であったため、ほぼ一人で事務所を守りつつ、理事や監事の私宅や仕事場を回って緊急の連絡事項を伝え、ハンコを貰うために走り回る日々であった。だがそこは、戦後の日本の民主化を目標とし彼女の得意分野の英語を活かし、女性の地位向上を目指して働くことので

きる職場でもあった。学生時代の恩師（近くに住む宣教師やアメリカに帰国していた英文学教師など）に手紙を書いて、英書・英雑誌の寄贈を依頼したことが浅沼資料には記録されているが、家族の記憶によると、それだけでなく資金集めに必死で紹介先を回っており、苦勞も多かったが人の情けに触れることもできたという。

また、クルーガー図書館が京都大学にあった頃は、「京大や三高の苦学生が多く、食事を満足にとっていない学生を度々一緒に連れて帰り、浅沼家の食卓には子供五人以外に、大学生五人位の食客が同席している姿が普通だった」「鍋なら五人分を十人で食べられる」「少ない食料でも分け合って食べると美味しい」というのが浅沼家の食事風景だったという。高等教育を受けながら社会の中でそれを活かすことができなかつた一人の女性が、戦後期を必死に生きる中で出会ったクルーガー図書館での仕事の意義を、想像できるのではないだろうか。

参考書目

浅沼資料は全て中岡百合氏所蔵の、故浅沼園子が遺した資料である。

荒金義喜『大澤善夫』（非売品）大善株式会社 昭和四三年

有賀誠一「父、有賀鐵太郎への想い」『基督教学研究』三八 二〇一九年 七七一―九二

有賀鐵太郎『有賀鐵太郎著作集V 信仰・歴史・実践（説教、講話）』創文社 昭和五六年

『歩みは光のうちに』日本基督教団出版局 昭和五二年記念版

伊藤彌彦『占領軍同志社関係資料（一）』同志社談叢』三八 二〇一七年 三一―五四

大久保利泰『霞会館』京都支所』のあゆみ』霞会館 二〇一〇年

大佐三四五『コロンビア大学図書館 学部に在学の思出ばなし』『図書館雑誌』二五―六 一九三二年六月 二〇三―二二二

大澤善助・述『回顧七十五年』昭和四年（非売品）印刷 田中幸平

『華族会館の百年』東京 霞会館 一九七五年

『京都学芸大学開学一五周年誌』一九六四年 開学一五周年誌編集委員会

『京都新聞』昭和二〇年九月―二四年二月

『京都大学附属図書館六十年史』京都帝国大学 一九五九年

- 『京都府教育委員会関係学校職員録』 京都府教育委員会 昭和二五年九月一日
- 『京都府教育便覧』 昭和二四・二五年度 京都府教育委員会
- 京都婦人のあゆみ研究会『京都の婦人のあゆみ―京都戦後婦人運動小史―』
- 小林政治『毛布五十年』発行者 小林基治 小林産業KK 一九四四年
- 小林園子・千賀子・章子『星の子ども』天祐社 一九三二年
- 今まど子『京都にクルーガー図書館があった』中央大学文学部紀要 一七四 一九九八年 五七―八七
- 〃 『CIEインフォメーション・センターの活動』『現代日本の図書館構想―戦後改革とその展開』勉誠出版 二〇一三年 八七―一五四
- 佐藤秀夫・鈴木英一『敗戦直後の京都・新教育勅語構想―有賀鐵太郎とシーフェリン』(『季刊教育法』四三、九二―一〇三) 一九八二年四月
- ジョン・シーフェリン著『新しい国家―アメリカの民主主義に就て―』翻訳・京都国際文化協力会(代表者 難波紋吉) 昭和二二年 富山房 (Commander J. J. Schiefelin, *A New Nation-Official Information for Young and Old about American Democracy*, Kyoto Kokusai Bunka Kyorokoku Kai 1947, Fuzanbo)
- 鈴木英一『日本占領と教育改革』勁草書房 一九八三年
- 『全国図書館職員録』日本図書館協会 昭和三〇年一〇月一日
- 昭和二五年度事業報告 / 三七年度 / 五一年度 京都府立図書館
- 谷口寛一郎『図書館学究故大佐三四五君を憶う』『図書館界』一九一五 一九六八年一月 二二―四一、二二五
- 同志社大学アメリカ研究所編『あるリベラリストの回想』湯浅八郎の日本とアメリカ―日本YMCA同盟出版部 一九七七年『図書館職員名簿』(昭和三四・三五・三六)
- メリー・キモト・トミタ、池田比佐子訳『ミエへの手紙―戦時下日本を生きた日系米国女性の記録―』朝日新聞社 一九九九年
- 難波紋吉『大沢徳太郎』(同志社人物誌六)『同志社時報』六号 一九六三年 四八―五四
- 〃 『共同社会と文化領域』『同志社論争』五三 一九三六年 一―二〇
- 〃 『アメリカ社会とその精神』『理想』一五―一七 一九四一年 五一―八

「アメリカ帝国主義の一樣相」『同志社論争』七二 一九四一年 五一―六三

「アメリカニズムの破綻」『中央公論』四月号 一九四三年 七〇―八〇

難波紋吉博士追憶集刊行会『難波紋吉博士の人と学問』中西印刷 一九八一年

西川祐子『古都の占領―生活史から見る京都一九四五―一九五二』平凡社 二〇一七年

原田積善会三十年小史刊行会『原田積善会三十年小史』一九五〇年

真銅正宏他『小林天眠と関西文壇の形成』和泉書院 二〇〇三年

三浦豊二(編輯兼発行)『大澤善助翁』(非売品)発行 大澤善助翁功績記念会 昭和四年

『都新聞』昭和二年―四年、三二年

『都』と『日出』『戦後京都の夕刊紙』『総合資料館だより』No.165 二〇一〇年一〇月一日

弥吉菅一『大阪「赤い鳥」入選児童詩の探求―関係者のその後を訪ねて―』関西児童文化史研究会 二〇〇一年

与謝野迪子『想い出―わが青春の与謝野晶子』三水社 一九八四年

Kevin C. Holzimmer, *General Walter Krueger: Unsung Hero of the Pacific War*, University Press of Kansas, 2007

General Walter Krueger, *From Down Under to Nippon: The Story of Sixth Army in World War II*, Combat Forges Press, 1953